

Report

ダウンアンダーの国から ④ 大貫映子

大学生になって一年半。本日、最後の（落第しない限り）試験終了！ 結果はともあれ、終わったことで十分うれしい。もう、上達しない英語のために四苦八苦というのはコリゴリ、って感じもする。ただし、卒業リサーチの提出期限まであと7日あり、まだまだプレッシャーからは解放されないのだけれど…。

半年間、外国人のための英語コースに通った後、昨年2月、全くまぐれとしか言いようがないのだが、エディス・カーワン大学のレジャーサイエンス（人間健康学部）というコースに入学できた（試験のヤマが大当たりすぎて震えてしまった）。

正式にはグラデュエート・ディプロマという1年のコースで、日本式に考えるとすでに大学卒業資格を持つ人のための学士入学制度だ。レジャーサイエンスという専攻は日本では耳なれないかも知れないが、一番近いのは「社会体育」「生涯スポーツ」「レクリエーション」といった分野であろうか。しかし「レジャー」には芸術、音楽活動などもあるわけで、応用分野の幅は広い。

「レジャー」の定義は日本では単純に「余暇」と訳しているかもしれないが、実は「余った暇」なんていう、どうしても良さそうな響きはない（とはいえ、英語圏であっても、仕事志向－経済活動優先志向－の社会では「レジャー」時間を持つのはさげたいという考えは強い）。

いろいろな研究者が、レクリエーション、レジャーの定義をまとめている。現在、西洋の社会学で考えられている基本的な概念は——「外からの圧力、強制、義務などからいっさい自由で、純粹に自分が選び、自分のための 1. 心の状態 2. 活動 3. 時間」となる。

つねに「ワーク」（仕事）とともに人の心の状態、活動、時間を分け合い同時に存在し、より人間らしい、質の高い生活に大切なものなのである。だから、失業者、退職した人、受刑者たちなどの生活の中にも、たとえ現金の入る仕事ではなくても、仕事の時間（技術を習得する、物をつくりあげるなど）と、単純に開放的な気持ちになる自主的活動の時間のバランスをとることがストレ

スを和らげることにもなる。

さて、自分の意志で、しかも自分の貯金をはたいて「勉強」したいとここへやって来た私にとって、前述の概念からいくと、この勉強は「レジャー」にあたる。しかし、元プロの通訳ガイド氏に「大学にいきなり入りたかったなんて無謀」とまでいわしめた私の英語力（バックバッカーのサバイバル英語って感じでしょうか…）で授業についていくのは本当に必死で「レジャー」というにはあまりにストレスも大きかった。

辛いこともあるが、自主的に選んだもので「我を忘れるほど没頭するような行為」は“シリアス・レジャー”と分類されるのだが、今回の勉強は私にとっては、やっぱり「ワーク」だった気もする。お金をもらえるどころか、学費をたっぷり払っての「ワーク」…。

しかし、社会人学生が多いのは（全体の2割？）刺激になった。こちらでは出産を機会に仕事を辞め、子育てしながら大学のパートタイムの学生（半年に規定の半分以下の科目数だけ登録）をして、この間キャリアアップを目指したり、孤立しがちな子育ての時期、社会とのつながりを持つという女性の学生は多い。

合気道4段のケイティー（西オーストラリアWSF 会員）もこのコースで知り合った経験豊かな、問題意識の高い社会人学生の一人。日本に4年間、合気道を勉強にいった帰国後、学生になった。彼女はWSF ジャパン事務局の高橋さんの知り合いだったことを後から知ったが、私が「勉強が大変」と嘆くたびに、彼女には、「でも、自分で選んだんでしょ」なんていわれ、何も答えられなかったこともしばしば。

でも、この「自分が好きで選んだ」とことというのがカギで、人は何とかガンバレるものなんでしょうね。再確認。

〈おおぬき・てるこ〉

82年、日本人で初めて英仏海峡横断水泳に成功。その後、南米のアマゾン川を45日間かけてカヌーで下る。障害児・者の水泳指導プログラムの開発なども行っている。93年7月より夫増島達夫さん、長男大介くんと共に豪州パースに滞在している。